

---

CAR LOVE LETTER 「Sea gull Mother」

YAS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C A R L O V E L E T T E R 「Sea gull Mot  
her

### 【Nコード】

N7570H

### 【作者名】

YAS

### 【あらすじ】

母さんの車で予備校へ向かう彼。勉強なんてしたくない、ギターをずっと弾いて居たいんだ。（テーマ車種：マツダデミオ（DY3

W）

(前書き)

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持つたことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

<Theme: MAZDA DEMIO (DY3W)>

「んじゃまたなー。」

「お、また母ちゃん迎えに来てんじゃん。お坊ちゃんだね。」

「うるせー！そんなんじゃねーよ。」

バンド仲間とそんなやりとりしながら、俺は母さんのデミオのリヤドアを開け、少し乱暴にギターを投げ込んだ。

「今日バンドどうだった？上手く弾けた？」

「いいから。もう行ってよ。」

俺は母さんと目も合わせずに、ぶすりとそう言った。

俺は高校で軽音楽部に所属している。同じ学年のドラムとベースの奴らとバンドも組んでる。一年生ではかなりいい感じのロックバンドなんだ。

でも今は母さんのデミオに乗って、予備校へのクルージングだ。最低だね。

俺は勉強なんてやりたくない。ずっとギターを弾いていたい。将来はコイツで食って行きたい。真剣にそう思っているんだが、親父がそれを許してくれない。

俺は一人っ子で、小さい時から親父に期待をかけられてきた。

今通ってる高校は市内でも有名な進学校で、中学2年の時から、親

父にここに行けと決められてたんだ。

みんなが遊んでる休みの日も塾の講習。俺は勉強が苦しくて苦しくてたまらなかつた。

だが母さんが、俺が入学出来たらば、ずっと欲しがってたギターを買ってくれと言った。

俺はそれを目標に、一生懸命頑張って、何とかここに滑り込んだんだ。

入学して、念願だったギターを手に入れてからは、バンドに明け暮れる日々だった。

もちろん成績は伸びない。親父は怒って、俺を予備校に通わせる事にしやがった。

予備校の授業に間に合わせるためには、部活なんてやってる時間はないなかつた。

俺は強く親父に抗議したのだが、学生の本分は勉強だ、それを趣味の為に怠るのは本末転倒、とまったく聞き入れてくれなかつた。

俺、部活続けられないや、と失意のメールをベースとドラムに打っている、母さんが部屋にやってきた。

母さんが学校まで迎えに来れば、部活を続けられるんじゃないか？という提案だった。

親が学校に迎えに来るなんて恥ずかしくてたまらないが、俺は、とにかくバンドを続けたかった。俺はバンドのために恥をかくことにした。

以来母さんが学校まで迎えに来る様になったのだが、俺についたあ

だ名は「坊ちゃん」だ。何とも不名誉だ。

予備校の授業が終わり、遅い晩飯を食う。母さんがバンドの話や最近のテレビの話なんかしてくるが、俺は話半分。

食事の後は、宿題と予備校の課題を片付けて、さあ、ギターが弾けるぜ。

親父がうるさいから、アンプの音は小さく絞って。

この時だけが俺を忌まわしい現実から解放してくれるんだ。

次の日も、また次の日も、俺は母さんのデミオで予備校に通う。

エンブレムがカモメみたいよねと母さんは言う。

オレンジ色のカモメは今日も、学校の門の脇に停まっている。

俺は母さんのカモメに乗らなきゃならない。

俺の自由を奪うこの車が、俺はホントに大嫌いだった。

学祭が近づくに連れ、練習が思うように進んでない事に焦りを感じた。

俺は予備校通いで練習出来なかった事を心底悔やんだ。

ギリギリの仕上がりで、俺達は学祭を迎える事になってしまった。

学祭のライブは生涯初のライブだ。

ムチャクチャ緊張している。それは俺だけではないようで、ベースのやつなんか、さっきから何回トイレに行ってる事か。

心の準備が出来ぬまま、俺達の順番がまわって来る。緊張は最高に達した！

一曲目の、ギターで始まるかつこいいイントロ、いきなり俺は入りのコードを間違えた。

メンバーみんなが顔を見合わせる。そして大爆笑。観客席の同級生達は、ポカンとした表情。

でもこれで一気に緊張が吹き飛んだ。

仕切り直してもう一度！練習の時以上にメンバーの息がピッタリと合う。最高のステージだ。俺は何もかも忘れ、夢中で弦を弾きまくった。

学祭は終わったが、俺達はまだ興奮冷めやまぬ状態。クラスの女子も誘って、カラオケに行く事になった。

だが、校門にはいつもの通りの、オレンジの母さんのデミオが居る。そうだ。これが現実なんだ。でも、今日の俺は現実に戻るつもりはこれっぽっちもなかった。

俺は母さんに気付かれない様に、友達の陰に隠れてデミオの横を通り過ぎた。

そしてそのまま、朝までみんなと騒ぎまくったんだ。

家への足取りが重い。土曜の朝だし、親父も必ず家にいるだろう。携帯には、母さんや家からの着信が10分おきに夜中の3時半まで残っていた。

もうこのまま消えてしまいたかった。でもどうしたらいいか分からず、悶々と考えながら歩いていると、気付けばもう家のすぐそばだった。

玄関に上がると、母さんがリビングから出て来る。

「あんだ、今までどこに行ってたの・・・!」

すぐに親父も出てきて、俺は思いきりぶん殴られる。

メチャクチャ怒鳴られ、殴られ、そしてギターを取り上げられ、俺は全てが終わった様な気がした。

勉強が大切なのはわかってる。でも今しかない友達との時間も大切にしたい。

俺はこの家に生まれた事を、これほどまでに呪った事はなかった。

俺はその日、部屋から一步も出なかった。

飯も食わず、涙を流しながら、ベッドでゴロゴロし、好きなアルバムを何度も何度も聴いていたんだ。

その夜遅く、母さんが部屋にやってきた。オニギリと味噌汁と、左肩には俺のギターを携えて。それを俺に、はいとよこし、少しお話ししようか、と優しく言ってきた。

とにかく腹ペコだった俺は、夢中でオニギリと味噌汁を掻き込んだ。そんな俺を眺めて母さんは、心配したんだよ、と口を開いた。

「お母さんね、若いころ映画の字幕を書く仕事があったの。」

突然そんな事を話し始めた。初めて聞く母さんの学生時代の話。

映画が好きで、字幕を書く仕事に強く憧れて、留学して英語を勉強したかったらしいが、爺ちゃんの強い反対にあって、全く自分の好きな事をさせてもらえなかったと言う。

そんな経験から、俺にはそういう思いをさせたくなかったって。とは言え、一家の主である親父の意見は強いし、親父も俺の事を思っ言っている。

ならば、勉強と好きな事を両立出来る様にすればいいと。

俺は間違ってたんだ。

母さんのデミオは、俺から自由な時間を奪っていたのではない。俺の自由な時間を守ってくれていたんだ。

俺はホントに情けない声を上げて、母さんの前で枕につつぶして大泣きしたんだ。

恥ずかしかつたけれど、俺は泣かずにはいられなかったんだ。

次の日も、母さんのデミオは校門のそばで待っている。

「お、また母ちゃん迎えに来てんじゃん。お坊ちゃんだね。」

「そーだよ。俺は坊っちゃんさ。うらやましいか？」

俺は母さんのデミオのリヤドアを開け、ギターをひょいと投げ込んだ。

「今日も上手く弾けた？」

「ああ、そのうち聴かせてあげるよ。」

母さんのデミオに乗って、予備校までのクルージング。

ま、悪くないかな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7570h/>

---

CAR LOVE LETTER 「Sea gull Mother」

2010年10月13日13時54分発行